



TITLE:

人間愛の起源(上)

AUTHOR(S):

川村, 多實二

CITATION:

川村, 多實二. 人間愛の起源(上). 經濟論叢 1925, 21(5): 639-654

ISSUE DATE:

1925-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128345>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 五 號 第 二 十 二 卷

大正十四年十一月一日發行

論 叢

人間愛の起源……………教 授 川村多實二

租税公正の實現難……………法學博士 神戸 正雄

現象學的基本考察……………文學博士 米田庄太郎

時 論

關稅特別會議に就て……………法學博士 末廣 重雄

勞働組合主義と集合契約……………法學博士 河田 嗣郎

說 苑

金利と物價との相關關係に就て……………經濟學士 谷口 吉彦

歐洲に於ける家産運動及び家産制度……………經濟學士 八木芳之助

スミスの植民地論について矢内原
教授の教を乞ふ……………經濟學士 長田 三郎

雜 錄

生計調査より觀たる租税負擔……………法學士 沙見 三郎

法 令

重要輸出品工業組合施行規則・輸出組合法施行規則

附 錄

本誌第十一卷乃至第二十卷論題索引

(禁 轉 載)

經濟論叢

第二十一卷 第五號

(通算第百貳拾五號)

大正十四年十一月發行

論叢

人間愛の起源 (上)

川村多實二

一人獸の別

數年來我國上下に戀愛問題が喧しくなり、雜誌や著書の上で之に關する意見を發表した學者や文士が甚だ多い。私にはその多くを讀む機會はなかつたが、大抵は唯古人の簡單なる常識に基ついた舊説を反覆したものか、さもなくば流行の哲學や藝術觀にかぶれてむつかしく考へ廻したやうなものであるらしい。即ち戀愛と愛とは別のものだとか、性慾と戀愛とはどう違ふとか、絶對無限至上のものだとか、美的價值倫理的價值がどうかいふ風に、字義の定め方によつてど

うでもなるやうなもの、若しくは實世間から遠く距つた夢の國の話でも聞くやうな議論が、大部分を占めて居ると思ふ。中には「愛の科學」といふらしい題を掲げて、内容は基督教の說教のやうなことを書いた本もある。此點に於て米田庄太郎博士の著書「戀愛と人間愛」に收められてある數篇の論説は實に敬服す可き出色の文字であつて、廣く社會學心理學並びに生物學の知見を包括し、進化的研究法により頗慎重に愛情の諸問題が取扱はれて居ると思ふが、然し生物學を學習する私どもにとつては、更に多くの動物學上及び比較心理學上の事實を根據として、一層深く人類の天性を考察した議論が有つて然る可きかと望蜀の念が起らぬこともない。

從來歐米生物學者の著述中には、廣く動植物界に亘つて生殖現象の事例を集め、下等なる綱目より高等なる綱目に到る間に雌雄關係若しくは育兒方法の漸次發達進化し行く有様を詳述したものが無いでもないが、次に述べる二つの理由からして、皆前記戀愛哲學論者達の顧みるところとならなかつた。その一は、何事にまれ人類の場合と他の動物の場合とは全然異りたる問題であると思ふ古い慣習が、頭から彼等をしてこの比較研究を輕侮せしめたことで、他の一つはこれ等の生物學書には比較心理學の側から見て甚だ大なる缺陷があり、動物の高下を問はず有性生殖種屬保存以外には愛情なるものが毫も存在しないやうな口吻を以て押通してあることである。此中第一の豫斷的僻見に就ては、近代の科學的態度進化的考察を以て人間の諸問題に臨まうとする

人々だけは、既に全く脱却し得て、動物學上の事實を考慮に入るゝことに各ではないのであるが、恐らく第二の人獸の區別を無視した一本調子の所説に辟易して、生物學的事實の引證參照に躊躇するのが今日の實狀であらうかと思ふ。之は生物學者の側で大に反省せねばならぬ。

さて現代の多くの人々は、自然界に於ける人類の位置に就て、大なる誤解をして居るらしい。申すまでもなく、前世紀の中頃までは何處の國でも人類と他の動物とは全然懸け離れた者と考へられてゐたので、ダーウインを初めスペンサー、ハックレー、ヘッケル等の初期の進化論主唱者は、此人間と畜生の間の墙壁を除去することに全力を注ぎ、盛に「人類と猿とは極近い親類だ」とか、「人類と類人猿の距離は類人猿と猿との距離よりも近い」といふやうな宣傳をやつたものである。之は決して嘘でも方便でもなく、解剖形態構造の上からは、眞實その通に相違ないのであるが、然し神經系統の官能特に大腦皮質の生理作用に於ては、全く例外と申すの外なく、人間は遙かに他動物の群を抜いてゐること、云ひ換へれば、知能といふ標準を以て測つた場合、人猿の中間には他の孰れの動物部門の間にも介在せざる一大灣が横たはることを忘れてはならぬ。何といつても人間は矢張り萬物の靈長である。

意識の存否を内省法によらず、行動によつて客觀的に推論することは甚だ困難なことであるから、吾々は他動物の心中を精確に推測することが出來ぬけれども、神經系統の解剖學的知見や生

理學的實驗の結果に徴して、人間から漸次下等動物に向ふに従つて意識が著しく不明確となり斷片的となることが推論せられる。就中智能の如きは最も速に減少し行くもので、無脊椎動物に到れば、極高等なる節肢動物と軟體動物とを除く外、全く之を缺くと云つてよいやうである。つまり人間と他動物との間に客觀的には引續きの一系列を作ると思はるゝ現象があつても、人間では完全に之を自覺意識してやつて居るに拘はらず、他の動物では多少若しくは全然無意識に之が行はれてゐる場合が少くない。例へば下等の動物が外圍状況の不適當なる場合に體を圓くし厚皮を被つてその中に潜むのも、爬蟲類や兩棲類が地中に蟄居して冬寒を避くるのも、皆吾々が衣服を重ね障子の破目を張り繕つて冬籠をなす知的動作に比す可き本能であるが、吾々が體の運動や不快の感情を自覺してゐるやうな明瞭な意識は彼等には殆ど全く缺けてゐるであらう。其證據には手術して前腦を取り去られた蛙でも、溫度を低下せしむれば地中に潜らんとする反射行動を現はすものである。従つて下等動物の行動を解釋する場合に、吾々人間の場合から類推して、高等複雑な心理活動があると見做すことは、何人もよくやることではあるが、之は大に慎まなければならぬ。動物の本能には随分巧妙複雑なものがあり、然かもそれ等の完全なる合目的性を見るとき、恰かも吾々が知能を以て利害得失を考へてする行爲に類するために、之を引續きの一系列と誤認することは、從來甚だ屢起つたところのものである。

二 相互扶助性

右に述べた如く、人間と動物との間に、外見上即ち客觀的には酷似せる習性でも主觀的に精神方面から見れば著るしき徑庭のあることを忘れてはならぬ。私が茲に考究してみたいと思ふ愛の問題に就ても亦全く同様で、雌雄相近づかんとし、若しくは親が子を庇護せんとする習性即ち客觀的愛は、頗る下等なる動植物から既に見らるゝことであるが、意識的に目覺めたる主觀的の所謂愛情なるものは、人間及び之に近き若干の動物のみが之を持つものと認めなければならぬ。英人トムソンが「多くの動物も戀をするが、自ら戀することを知れるは人間あるのみ」といつたのは、茲である。此事實は少しく神經系統の解剖や生理を學んだ者には直ちに明瞭である可き筈であるが、實際は動物學者の中でも此點に就て著るしき誤謬に陷れる者が多く、ダーウインは蟻の腦力を人間以上なりと信じ、ブレイムは鶴と鸚鵡が人間並の思慮分別愛憎の念を有つと記し、ジエニングスはアミーバが敵と虚々實々の戦を交ふることを目撃したといふ。兎角物事は、そう思うて見て居ればそう見えるものである。事態かくの如くであるから、今日の動物學書中には、動物の慈愛悲嘆嫉妬複讐心詐僞術策などを主題としたインツプ物語式の面白い話が多數に採録されてある。我丘博士の煩悶と自由、谷津博士の母の愛などの近著にも此種のお伽話が到る處に散見する。尤も谷津博士のは動物學といふ立場を離れて、態と擬人的に書かれたものと解してよい

かも知れぬ。

近代若しくは現今の動物學者でさへこの有様であるから、況して動物學を深く專攻したことのない一般の人々が人獸の差別を誤認することは寧ろ當然のこと、せねばならぬであらうが、此種の論著の好例として私は更にクロボトキンの「動物界に於ける相互扶助」をも舉げ得るのである。彼は雀が食物を仲間に分配すること、蜜蜂が裁判や刑罰に比すべき處置を爲す話を信じ、鳥やベリカンが盲目なる友達を扶養するといふ話をも怪しまなかつた。二羽の鸚鵡の一羽が病死したとき他の一羽が悲嘆にくれて餓死したといひ、野兎が舞踏に夢中になつて狐をも仲間と誤認するといつた。又ブライトンの水族館で彼親ら、一匹の裏返つて仰向になつたカブトガニをば他のカブトガニが起してやらうと謀り、他の友人まで誘ひ來つて手傳はせ、二時間以上もかゝつて猶倦まなかつたのを、目のあたり見たと書いて居る。土が崩れて入口を塞がれた穴居性の小獸を、隣近所に棲む仲間共が堀り出して救つてやるといふ話も載つてゐる。然し乍ら私共の考ではすべて此等の話に二重の誤謬があると思はれる。第一には前節に述べた如くいづれも常に下等動物が吾々と同一程度の意識を有ち、利害得失を推算して理知的行動をなすものと假定しての記事である。クロボトキンは數十年前未だ動物學者でさへ人獸の差別を悟らなかつた時代の人で、しかも素人である上に、熱心にかゝる傳説を蒐集しつゝあつた慾目もあつて、容易にかゝる誤解を爲したこ

とは、少しも怪むに足らぬことである。第二の誤謬といふのは、それらの記事はたとへ無意識の本能としても、多くは理論上有り得べからざる事實である。元來夫婦親子以外の他の仲間を愛護し救済するやうな特殊な相互扶助の本能は、動物界にそう無暗に何處にでも存在するものでなく、それが有る可き所は明に定まつて居るのである。抑も生物體は種々の器官の集合からなり、各の器官はまた多くの組織の集合からなるものであるから、それらの生物體若しくは器官が生理的活動を營爲して行くためには、その各部分が一の統制の下に協調を保ち、業務を分擔することが必要である。眼球が滑かに廻轉するためには、之に附着する澤山の筋の間に全く調和せられたる收縮弛緩が行はねばならぬ。口から入つた食物が消化吸収せらるゝためには、之を次々に送る運動、消化液を分泌して之に混交せしめる方法、而して液化せる食物を吸収する手段が、最も巧妙に講ぜられねばならぬ。通常此統制に與つて力あるものは神經系統であるか、然し未だ神經細胞の發達しない下等の動物でも、原形質そのものに既に此性質が備はつて居る。例へば卵が唯一個の精子のみを受入れて他を排除する場合、或はアミーバが偽足を出して匍匐する場合の如きものである。若しアミーバの體の各部分が個々別々に勝手に行動するならば、彼は何方へも行くことは出来ぬわけである。要するに二個以上の同質若しくは異質の要素を集めて爲るところの生物體では、如何なる場合でもそれ等の要素の間に調和協同業務分擔の性質が賦與せられてゐるので

ある。此同じプリンスプル即ち合目的性は多數の個體が集合して或共同の生活法をとれる場合にも亦存在してゐる。それは珊瑚蟲や菊石などのやうに、體が引續きとなつて居る場合にも、蟻や蜜蜂のやうに別々の個體であつても、少しも變ることがないのである。前節にも述べた通り、合目的性は本能の著るしき特性の一で、往時本能を定義するに合目的性の無意識運動なりとした學者も澤山あつた位である。そこで此協調性或はクロボトキンの所謂相互扶則性は蜜蜂や蟻の如き一定の社會を形づくつて居る場合に限らず、共同の敵を防ぎ又は共通の食物を襲ふ必要上から、或群棲性の動物に發達してゐることもある。例へば四方明け放しで不要慎な曠野に棲む有蹄類例へば野生の驢馬や羚羊は肉食獸の來襲に備へるために群集するが、彼等の中一匹（通常は年長の雄）が全群の先達の如き役目をなし、他の個體はその行く方向に隨從して走るといふ風である。雁が水田に降つてゐるとき、群中の一羽は番兵の役目をなし、一段高き畔に登り頸を伸ばして四方を展望してゐる。共同して獲物を狩る場合も亦狼や鷲の如き肉食動物にて知られてゐる。かくの如く相互扶助の本能は群集生活や社會生活をなす動物の種屬では種々の程度に進化發達してゐるのであるが、然し單獨生活をなせる動物種屬に親子夫婦以外にそんな本能的の親和性がある可き筈がなく、又實際に發見せられたこともないことを考へねばならぬ。尤も他の本能に關聯して一見この相互扶助性と見誤る如き場合は澤山ある。例へば遊戲のための相手を欲しがる幼獸

の場合の如き、長距離の移動に密集して旅行する渡り鳥の場合の如きがそれであるが、クロボトキンのやうにそれ等の場合までも相互扶助性と呼ぶのは誤りである。彼はシギやチドリに群つて海を超えること多數の鹿が松花江の河幅狭き所を群集して渡渉したことなどを、社會生活と解し、相互扶助の例證としてゐるが、それには敵襲を防ぐに便なる客觀的合目的性は認められるが、蜜蜂が食物を仲間同志に分與したり、雁が犠牲となつて番をする場合とは異り、單なる密集、單なる道連れに外ならぬ。況して彼の引用してゐる、八羽の鳶と一羽の鶴と一羽の鷺が一緒になつてビレニース山を越えた記事など、少しも相互扶助性の例とはならぬ。此外には尙彼が相互扶助と誤認した一群の出來事がある。例へば彼ゲーテが非常な興味を持つてエッケルマンから聞いたといふ、ミンサザイの孤兒を駒鳥が養育した話などもクロボトキンは相互扶助性の好例と解してゐるが、之は本能に屢起るところの間違ひの一であつて、カゲロウが水と間違へて光る物體に産卵せんとし、鳩が雌と間違へて硝子罎と交尾せんとする話などの部類に入る可き事柄である。要するにクロボトキンが動物の相互扶助として引用したる實例の中或ものは事實あり得可からざる話であり、他の或ものは事實無根ではないが、群集生活又は社會生活の必要上與へられたる合目的性本能であるから、吾々人間の場合の親切とか博愛心とかいふやうな心理とは大に懸隔のある行動であるのである。

序に茲で一言して置き度いのは、鬭争の本能も亦多くの人々の信する如く、無暗に何處にでも見られることでない。肉食動物はその習性として食物となる他の動物を狩獵することはするが、然し同種間で相喰むといふことはない。檻の中の二匹の虎はたとへ餓死してもお互に相喰むことはしない。尤も間々友喰ひといふことが見られるが、之れは食物と仲間を混同した本能の間違か、若しくは知能即ち後天的習癖である。平生溫柔な動物が蕃殖期に氣が荒くなつて、無暗と嚙んだり突いたりすることも事實であるが、之も亦眞の鬭争性ではなく、若し何の關係もなき他の動物を襲ふならば、それは本能の間違である。本能なるものは融通のきかぬ、鑄型にはまつた様な行動である上に、大抵は之を起さしむる要因の簡化が起つてゐて單一若しくは少數の刺激によつて直ぐに發するやうになつて居ることが、此間違を起し易き主なる理由である。

三 人間の社會的親和

昔から愛情に關した議論や研究を爲した多くの人々は、皆一樣に、人間の心の奥底に、ある隣人と親しみ之と相倚らうとする何物かがあると考へて、それを社會構成の原動力として居る。この根本精神が何であるかは學者の見の所が區々で、或は同類意識と呼び、或は暗示模倣に類するものと思ひ、或は同情の如きものと説明して居るが、近頃は動物の群棲本能又は社會生活本能を

根據として、之と同じものが人間にも亦存するといふソルヴェー一派の學說が有力であると聞く。而して我米田博士も亦此最後の說に賛成して居らるゝやうであるが、私は之に關して少しく卑見を述べて見度い。

クロボトキンの所謂相互扶助性が動物界に廣く行亘つて居る通有性であるといふ考が、動物學上から見て首肯し難きことで、かゝる協同的本能は唯群集生活、社會生活を爲す動物に限つて存することは前節に述べた通りである。ところで、人間は現今社會生活をして居るのだから、そんな本能があつて當然ではないかと云つて退ける人があるかも知れぬが、決してさう簡單には行かぬ。何故かといふと、第一に原人は少數の家族的生活即ち親子兄弟が一團となつて生活して居たので、隣の一家とは風馬牛相關せず、殆んど没交渉に大部分の時間を送つたものと考へられるから、此時代に纏まつた社會的本能があつたとは考へられぬ。第二に然らば、單獨家族生活の原人から、今日の社會生活に進化する間にこの本能が現はれ且漸次強まつたと説明してよいかといへば、此人類進化の間に著しい進化を遂げたものは知能であつて、多くの本能は毫も進歩しなかつたばかりでなく、寧ろ大に退變したと認めなければならぬから、社會的本能のみが此例を破つて新に現はれ益々増長したといふことを承認するには、餘程確實なる根據がなくてはならぬ。

話が一寸中斷するが、茲に私の用ゐる本能と知能の字義に就て斷つて置く必要がある。此等の

二語は學者によつて種々の意味に使用せられ、頗る紛らはしきものがあるが、私は或行動に關する中樞神經系統の活動範圍（即ち興奮傳達せらるゝ纖維の徑路刺激せらるゝ中樞の位置及び組合せ等）が先天的遺傳的に定まつて居る場合を本能とし、この範圍が後天的慣習によつて決定せられる場合を知能とするのである。後天的慣習によつて決定せられるといふことは、詳しく云へば、神經細胞の連絡によつてなる神經系統には一度興奮の通過した徑が次には他よりも幾分か通り易くなるといふ一つの特性があることから起る現象であつて、吾々生物學者は之によつて學習とか記憶とかを説明するのである。従つて私の云ふ知能なるものは知情意と分けて論ずる場合の智能などは全く別のものである。つまり私のいふ本能と知能とは中樞神經系統活動の範圍決定獲得の時期が先天的であるか、後天的であるかによつて異なるので、定義としては從來の曖昧なものゝ違つて、至極簡單明瞭なるものである。尤も茲に注意を要することは、生後直ちに出来ることなく、長時間を経て初めて現はるゝ行動必ずしも本能でないとは云はれぬ。昆蟲が繭を作る本能などはその例である。同時に人間の様に生れ落ちると直ちに聯想學習の始まる動物では、知能が甚だ早くより現はれてゐるのである。更に嚴密なる意味の本能でなくて、之を起し易き素因が多少先天的に備はつて居る場合がある。從來は大抵本能の内に混入してゐたものであるが、之と少しく異なるので實は後天的習得の一である。例へば精神病的なる性癖の如きが之に屬するので、

純粹の遺傳ではないが、罹り易き素因が遺傳して居る。恰も結核癰其他の疾病に就て醫學者が説明すると同じである。之は素因だけの遺傳であるから、中には一生涯發病せずして終る者もある。此精神病的性癰の場合の如き病的現象でなくて、動物の生活に有益なる性質の行動で、同様にして或は現はれ或は現はれざる例が數多くあるのであるが、之は從來の本能といふ語では、果して含まれて居たか否か不明である。要するに右の如き本能と知能の用ひ方を斷つて置かぬと、生理學的用法に慣れぬ人の誤解を招く虞がある。

さて再び元の社會的親和本能の問題に歸つて、先づ米田博士の説明を拜借すれば、「人間愛は社會的親和を根元として發生するものにして、其の單純なる元素の形態に於ては、社會的親和と殆んど區別され得ないが、しかも種々なる精神作用が其の上に加はることによりて、愈々豊富なる文化的意義を有するものに漸次發達するのである」と結論せられて居る。而してこの作り上げられる人間愛は「豊富なる倫理的或は文化的意義を含有する高等なる情操である」し、根元となれる「社會的親和は何等の倫理的或は文化的意義をも含まない處の純粹なる生理的心理的な或は精神物理的な自然的作用である」とせられて居る。こゝに米田博士の意味せらるゝ人間愛も社會的親和も、私共が茲に論じやうとして考へて居る語義とピッタリと會つて居るから、全く同博士に従つて使用することゝし、用語の點檢が終つたから、進んで借越ながら私の感想を述べるが、第

一に重大なる問題は、この社會的親和から人間愛に到るまでの變遷をば米田博士は原人から今日の諸人種に到る間の數十萬年に起つたと説明せられるのか、或は吾々の赤ん坊から成人に到る間にそう進行すると主張せられるかの點である。云ひかへれば、昔の赤ん坊よりも今の赤ん坊の方が人間愛が強いのか、或は赤ん坊の方は普通りで成人だけか違ふのか之が明瞭でないやうに思ふ。なせこんなことを云ふかといふに、吾々は社會學心理學倫理學又は生物學上の方面から見ても重大なるこの精神進化の問題を、出来るだけ精細に分析して見度いからである。此赤ん坊の比較の場合、まさか完全なる人間愛が今人の小兒に先天的に存するとは考へ得ぬから。右の變遷をすべて人類進化史上の發達徑路と解する者もなからうが、然し博士が他のページで社會的親和が社會組織の進展と共に、順次群族愛となり、種族愛、民族愛、人種愛、更に擴大して人間愛をなすやうに説明して居らるゝ點から、原人の本能的社會親和と今人の本能的社會親和(又はその進化した形のもの)との間に可なり著るしき差異があるやうにも取れる。然し又反對に博士の示された變遷が「豊富なる倫理的又は文化的意義を含有する高等なる情操」に達することである點から、殆んど全く後天的に個人の修養によつて醸成せらるゝことゝの、私の所謂知能上の變化であるやうにも取れるから、惑はざるを得ないのである。之れが從來多くの戀愛哲學者のやつたやうに、各種の愛を抽出し來つて、机上に並べた上で、その間の進化史を理論上から組立てるだけで濟ま

し得る場合ならば。どうしてもよい事であるが、實際の人類の進化變遷及び個人の一生涯に當嵌めて、事實上の材料に適合せしめて之を論じなければ、科學的研究とは申し難いから、斯様の穿鑿をも必要とするのである。

生物學の法則に「個體發生が系統發生を簡單に繰返す」といふのがあるが、若しこの場合に之が適合するものならば、原人から今人に到る間の社會的親和の變遷も、幼兒が成長する間のその變遷も略ぼ同一であると云はれるであらうが、此法則は極大體の變遷のことで、到底文明人の幼期に種族愛や民族愛の痕跡の出現を期待することは不可能であり、又その證左も擧つて居ないことゝ思ふ。

元來生活様式の變遷につれて人性が好都合に變化し行くといふことは、下等動物の場合の如く本能上の問題で且つ長年月の間に進化したといふのならばよろしいが、知能上の問題たる生活方法の知識即ち後天性獲得變形が、然も短日月の間に、その動物の天性とまで固定するといふことは、進化學上大に研究せねばならぬことであつて、今直ちに認容し難きことである。之等はいづれ他日を期して詳しく論じ度い。

要するに米田博士の主張せらるゝ(一)原始人類に他動物と同様な社會的親和が備つて居たこと、(二)夫れが人間社會の變遷發達と共に次第に進化して遂に人間愛迄なつたといふ二項の中、第一項

に對しては、博士も云はれる通り人間の原始的社會狀態を確實に究明することが不可能であるために、私も決して確かに云ひ得ぬけれども、前節に述べた通り原始人類が單獨生活をなして居たらしいこと、單獨生活をなす動物には何等社會的親和が無きのが通則であることから余程無理ではないかと思ふ。若し原始人類の生活に社會的親和性の萌芽が少しでもあつたとしたら、むしろそれは本能的のものではなく、即ち群集性動物や社會生活性動物の團體的本能とは別途の起源を有つものと考へ度いのである。次に第二項に對しては、社會學上の知識の乏しい私が彼は云ふのは僭越の妙汰ではあるが、人間愛が先天性本能として次第に進化し來つたとしては、人類の他の性質の場合と背馳するのみならず、そんな完全な倫理的文化的意義を有する性質を本能（從來の字義なる語を用ふるとしても）の中に假定することも如何と感ずるから、賛意を表し得ぬのである。結局私は（一人間及び之に近き動物の中樞神經系統に或特殊の構造性質があつて、後天的に然し極早くから他人を愛し之と親和せんとする傾向（即ち博愛の萌芽）を生ぜしめるのが、恰も他動物の先天性社會的親和と同じ様に見えるものであり、（二）年齢の進むと共に聯想や記憶のためにこの愛情が擴大せられるのが、種族の民では種族相當に、國家の民では國家相當に擴大せられるために、恰かも種族愛國家愛と見ゆるものと解釋し度いのであるが、その詳細は後節に述べることにする。（以下次號）